

VI 総合的考察及び課題

平成7年度から3年間にわたって、「生活を楽しむ子」という研究主題を設定し、研究に取り組んできた。「生活を楽しむ子」という研究主題は、「QOL（生活の質の向上）」「自分なりにいかに質の高い生活を実現し楽しむか」という今日的課題に適合した主題であり、本校児童生徒の実態から見ても妥当性のある主題であった。

われわれは、「自分がしたいと望み、自分がしたいことを選んで、自分の考えややり方で自己活動をし、それによって、達成感・成就感を得るという経験を積み重ねていくことが大切である」という仮説を持ちながら、授業のなかで、児童生徒に適した題材を選定し、発達段階や生活年齢に応じた支援をしてきた。このことによって、各学部の実践のなかで述べているように児童生徒は徐々に「生活を楽しむ子」に変容してきている。さらに、この取り組みを進めていくと、現在のみならず将来にわたって「生活を楽しむ子」を育てていくことができると考えている。しかし、現在の児童生徒の「生活を楽しむ姿」は、まだまだ教師の支援や題材を選定された上で見られるものであって、自らの力で生活を楽しむことは、十分にできていない。今後も「生活を楽しむ子」をめざした取り組みを続けることにより、「生活を楽しむ力」が定着していくと考える。

この紀要のなかで、研究主題のもとに子どもたちが徐々に変容している姿を述べてきたが、それ以上が変わってきたのは、教師自身ではなかったかと考える。つまり、「生活を楽しむ子」に育っていくことは、児童生徒が自ら「自分づくり」をしていくことであり、教師は共感しながら支援していくことが大切であるという考え方に立つようになった。これは、前テーマである「発達と障害に応じた教育をめざして——コミュニケーションに視点をあてて——」のなかでも考えてきたことではあるが、それをさらに進めて、児童生徒の考え方や生き方をも共感していこうというように考え方が広まり深まってきた。また、紀要の実践のなかでも「生徒に寄り添う」「生徒が行動を起こすまで待つ」というような記述が多く見られる。もちろんこのことはただ単に「待つ」だけではなく、生徒の実態を見極め行動が起こせるような支援を準備しながら「待つ」といったことも含め、「待つ」ことも積極的な支援であると考えようになった。このように、われわれ教師の児童生徒観、障害児（者）観が変わることにより、取り組みの姿勢も徐々に変わっていった。

この研究主題での取り組みは、一応、本年度をもって終わろうとしているが、この研究の評価が、児童生徒の変容の姿を観察によってとらえるような主観的なものになってしまい、客観的な評価が難しかったこと、研究が学部を中心に進められたため、各学部の連関を図ろうと努めたが、十分ではなかったことが反省される。

本年度までの研究主題である「生活を楽しむ子」やその基盤となっている自分づくりの考え方は、この研究の成果として、今後も踏襲していきたい。そのなかで、12年間一貫した姿勢で社会的自立をめざして、子どもたちを育てていけるような小学部、中学部、高等部の連関を考えていくことが課題である。さらに、学校教育ばかりではなく卒業後の受け皿である社会、現在の児童生徒を支えている社会や家庭との連携も大きな課題である。

(倉真理子)